様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３１１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４０４

研究課題名（和文）中国知識人の挫折と信念ーー蕭乾文学と思想の軌跡をめぐって

研究課題名（英文）Despair and Faith of the Chinese Intellectual Over Thought Traces of Xiao Qian

研究代表者
顧　偉良（GU, WEILIANG）

弘前学院大学・文学部・教授

研究者番号：５０２３４６５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　毛沢東時代に蕭乾の経験した土地改革、政治運動などを踏まえ、建国後の思想改造運動、文学事象をめぐって、六項目に亘って科研費報告書としてまとめた。〈一〉土地改革の讃歌、〈二〉思想改造の実態、〈三〉身分社会、〈四〉建国後の文学事）、〈五〉新哲学――「新唯物論」をめぐって、〈六〉蕭乾を振り返って。
　この研究は、中国知識人の知的精神及び自由な批判精神を継承することであり、これを通じて中国伝統文化の形象及び現代中国学術思想の反省につながるものと信じる。

研究成果の概要（英文）：I have summarized in the following way as my report for Scientic Research Funds:Considering the political activities Xiao Quian had undergone during the age of Mao ZedongMao Tse-tung, I have examined his thought-reform campaign after the founding of the country in terms of the following six viewpoints of literary matters:1) the participation in land reform 2)the reality of thought-reform 3)the society of social status 4) literary matters after the founding of the country 5)new philology—concering new materialism 6) reviwing Xiao Qian
This study aims to inherit the intellectual mentality, particularly the uncontrolled spirit of criticism, of Chinese intellectuals, and I believe that this study will lead to the reviewing of the representation of traditional Chinese culture and the academic thinking of modern China.

研究分野：日本近代文学

キーワード：毛沢東時代　思想改造の実態　文学事象　「新唯物論」　蕭乾の思想調書　蕭乾の生の証言　中国知識人の挫折　中国知識人の信念

１．研究開始当初の背景

二十世紀の激闘たる現代中国では作家たちは、真実な人生を以て文学に投じ、後世のために貴重な文学記録を残してくれた。これらは、必ずしも純文学の作品ではなく、回想録、手記、手紙、日記、ないし自己批判文を含めて、建国後の文学事象、または作家自身に関する人生の記録を残してくれた。後世になって過去の文学事象を回顧するにあたってそれらの記録は、大切な証言となるに違いない。これが中国現代文学の最大の特徴である。

作家蕭乾は、一九九九年に文学生涯に大きな空白を残したまま世を去った。八十九歳。蕭乾の文学生涯は多岐に亘っているが、一九五七年以降、「右派」のレッテルが張り付けられ、文学創作が禁止となり、晩年になって再び文学の青春が蘇えった。たった一枚の「名誉回復」（1979）の紙の裏には、激動たる歳月が流れていた。晩年の蕭乾は、弱者の立場で巷の人間界を見、過去の歳月をめぐって文学事象を語ったりした。

2014 年、日本語訳の蕭乾自伝資料が刊行されたが、この自伝資料は蕭乾の波乱万丈の生涯を如実に語ってくれた。この自伝風の資料は、一九五〇年代初期に書かせられた自己批判文であり、蕭乾を知る上では第一級資料である。中国現代文学、現代中国政治を語る上でも重要な意義を持っている。中国現代文学の研究が直面している最大の問題の一つは、多くの文献が解禁されていないことである。多くの自己批判文が謎のまま、未だに公開されていない。その意味で、蕭乾自伝資料は、文学者の証言として文学史に残されることになる。

２．研究の目的

本研究の目的は、中国知識人の知的精神及び自由な批判精神を継承することである。本研究を通じて、中国伝統文化の継承及び現代中国学術思想の反省につながるものと信じる。

本研究では、蕭乾の経験した毛沢東時代の政治運動を通じて、建国後の思想改造、及び文学事象について考える。研究構想は、六項目に亘って検証する。

〈一〉土地改革の参加、〈二〉思想改造の実態、〈三〉身分社会、〈四〉建国後の文学事象（1.文芸政策、2.「文芸講話」の志向性、3.ソビエト文芸理論）、〈五〉新哲学――「新唯物論」をめぐって、〈六〉蕭乾を振り返って。

３．研究の方法

毛沢東時代における文学事象は、ソビエト時代の文学事象を彷彿とさせるところが多かった。特に毛沢東時代に出された一連の文芸政策は、前代未聞であった。それによってあらゆる領域が一つの軌道に乗せられ、無限の多様さを持つ文学潮流が単調化になり、それを加速化するエピゴーネンの現象も同時に起こったのである。今、振り返ってみたら過去に発生した事柄がまるで幻影のように見えるかも知れないが、八十年代に書かれた夥しい回想録は、過去の時代、及び建国後の文学事象を語る上で重要な意義を持っている。

本研究では、蕭乾の経験した土地改革、思想改造をめぐって、建国後の文学事象、文芸政策に因む毛沢東の「文芸講話」、及び「新唯物論」に関するマルクス主義者艾思奇の論説を検証した。この研究は、蕭乾の経験した建国後の出来事を通じて、単なる個別の問題としてではなく、歴史的観点から中国知識人の知的精神、及び政治に対する自由批判の精神を継承するものである。

４．研究成果

本研究では、身分社会に関する蕭乾の見解を踏まえ、三十年代に郷村建設に取り組んだ梁漱溟の理論構築、及び毛沢東による中国社会の分析について検証した。中国社会、及びその政治構造上の「歪み」から、伝統文化の軽視につながった中国知識人の「理性」の問題が浮き彫りになった。マルクス主義思想の受容はその延長上にあると考えるべきものであろう。

梁漱溟によって指摘された事は、現代中国の思想と文学を考える上で注目すべきものである。その一つは、中国知識人の「理性」によるマルクス主義の受容であり、もう一つは、旧い思想体系の打破である。前者は、梁漱溟の指摘した如く即ち「学生革命」であり、それに対し理性の上で認識する必要がある。後者は、旧い思想体系の打破による伝統文化の見直しである。現代中国の思想文化を考えるにあたって、依然としてこの二つの大きな問題が立ちはだかっている。即ち、中国伝統の思想文化と氷炭相容れない教条主義であるマルクス主義の思想との矛盾が如何に解決されるべきか、そして、旧い思想体系の打破、伝統文化の価値の見直しに繋がる文芸復興の神髄が如何に継承されるべきか、ということである。この二つの問題は、現代中国学術思想の原点として、いずれも中国伝統文化の継承及び学術思想の発展を左右するものである。民国時代には自由な学問伝統が切り拓かれていたが、毛沢東時代には過去の学問伝統が破壊されてしまった。これが現代中国の学問思想史に於いて象徴的な出来事であった。中国知識人にとって最大の関心事は、過去の学問伝統を継承することである。

そして、「文芸講話」をめぐっては、三十年代のソビエト文芸理論、及び中国に於けるマルクス主義の思潮、新哲学としての「新唯物論」を説いた艾思奇の論述について述べた。毛沢東の「文芸講話」は、「新唯物論」から少なからぬ影響を受けていたものと推察できる。

艾思奇の『大衆哲学』は、観念論と唯物論の対立などの哲学上の根本的問題の解決を純粋経験に求め、主客合一などを説いた西田幾多郎の『善の研究』（1911）と比べたら、雲泥の差がある。それは単なる個人的なレベルの問題ではなく、マルクス主義の受け入れに関する中国の事情も絡んでくるのである。長らく思想空白の状態が続く中で、倫理思想の土台は、あまりにも脆弱だったのである。専ら政治的イデオロギーの面を重んじる儒教では、そもそも知識論を軽視する風潮があった。そのような思想的、社会的背景にマルクス主義の中国浸透は、当初は政治的な選択というよりも、寧ろ中国知識人は、新哲学としての「新唯物論」を絶対視するという急進的な一面があったのを無視できない。逆に言えば、階級論に基づく「新哲学」は、道徳的な面で人々の愛と憎しみに社会的階級的基礎を与えたのである。正に梁漱溟が批判したように、それは中国知識人の「理性」の問題なのであった。そうした風潮の中で「マルクス主義」の思想を正当化する動きが全面的に現れたのである。

毛沢東時代に犯された誤りの一つは、愛や憎しみといった感情がすべて階級意識によって分類されたということである。すなわち、ある特定の階層の人々に対する憎悪の感情を社会に植えつけさせ、そのうえ、それらの人々に対する憎しみを倍増させ、いわば憎悪の社会的階級的基礎を与えてしまったのである。そのような階級感情は、連帯、寛容、協調の精神とは程遠いものであり、また儒学の精神にも反するものでる。人間に対する認識が根本的に間違っていた。そのような憎悪の感情から生まれるものは何かというと、野蛮のことである。

現代中国の思想文化を考えるにあたって、依然として二つの大きな問題が立ちはだかっている。即ち、中国伝統の思想文化と氷炭

相容れない教条主義であるマルクス主義の思想との矛盾が如何に解決されるべきか、そして、伝統文化の価値の見直しにつながる文芸復興の道が如何にして継承されるべきか、ということである。前者は、梁漱溟が指摘した如く、近代中国知識人の理性認識に支障が生じたのである。梁漱溟から見れば、中国の倫理思想は相対論なのである。それに対し、後者は、新文化運動の推進者である胡適から出された文化相対論である。それは古い儒学の土壌で生まれるものではなく、新文化運動から生まれた新しい文化相対論である。

一人の作家について語る場合、当然ながらその文学作品について見るのが通常である。しかし、蕭乾の文学生涯に於いて小説創作は、たった五年間(1933—1938)しかなかった。一九三九年から一九四四年にかけて、ロンドン大学東方学院（School of oriental and African Studies）を経て、ケンブリッジ大学キングス・カレッジでイギリス心理派小説研究に没頭した。第二次世界大戦勃発後、一九四四年、ケンブリッジを離れ、ロンドンのフリート街（Fleet St）に設立された大公報新聞社ロンドン事務所の戦地記者として、第二次世界大戦の情勢を中国国内に向け報道した。蕭乾はもともと大公報新聞社の記者であった。一九四五年五月より、彼は大公報の特派員記者として欧州戦場に赴き、米軍第七師団と共にライン河を渡った。その後、ポツダム会談、国連大会成立、ニュルンベルク審判の取材に行った。それらの経緯につては、回想録に記されている。イギリスに於ける七年間の滞在は、蕭乾にとって貴重な体験であった。このように、蕭乾は同時代の中国作家とは異なる経歴を持っている。後に触れるが、その違いは、単なる経歴ではなく、何よりも彼が東欧型の共産主義社会の本質を知ったからである。それは中国にいた他の作家とは根本的に異なる点である。

一九四六年に帰国後、上海複旦大学英文科及び新聞学院教授となり、その後また香港に渡り、大公報の編集仕事に携わる。一九四九年帰国後、思想改造と土地改革の参加を経てからずっと一九七九年まで、その間、二十二年間に亘って創作権利が奪われた。文革後、漸く名誉回復がされた。晩年の蕭乾は、二つの回想録を書いた。一つは、『地図を持たない旅人—蕭乾回想録』（1988）、もう一つは、『蕭乾文学回想録』（1992）である。

『地図を持たない旅人—蕭乾回想録』は、英訳版も日本語版も出ている。日本語版の訳者の一人、丸山昇（元東京大学教授、中国文学研究）氏は、「解説」の中でこう語る。

> この本の魅力の第一は、先ずその体験してきた事実そのもの——この場合魅力ということばを使うのは、作者や家族たちがなめた苦しみに対して不謹慎であるかも知れないが——にある。中国の知識人は、多かれ少なかれ日本人の我々には想像し難いような苦労をしており、彼ら自身「中国の知識人の一生はみな一冊の本になる」とよくいうが、蕭乾の生涯はその中でも独特なものである。

「中国の知識人の一生は、みな一冊の本になる」とは、蕭乾自身が語った言葉であるが、蕭乾の人生について語られる一冊の本はと言えば、『地図を持たない旅人—蕭乾回想録』（1988）である。この回想録翻訳の際、丸山昇氏は蕭乾夫妻との文通交流を行った。

丸山先生ご夫妻は、東京大学の学生時代から中国に関心を持ち続けてきた。学生時代にご夫妻は活発な活動家であった。筆者はその往復書簡の整理にあたって、丸山昇夫人を訪ねたことがある。ご夫人から、「五十年代の中国は、私たちにとって希望の星でした。」という印象的な言葉が残された。ご夫妻が共に亡くなられたが、『丸山昇、蕭乾、文潔若往復書簡』（文潔若編訳、上海人民出版社、

2015 年 6 月）が刊行され、誠に意義が深い。日本語訳『地図を持たない旅人―蕭乾回想録』と共に、日本の学者と中国の作家との真摯な交流を物語っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　５　件）

１『万延元年のフットボール』を読む
　　――言語指向及び身体性をめぐって――
弘学大語文第４１号、pp, 左１－１６
顧偉良
2015 年 3 月、査読なし

２中国知識人の挫折と信念
――蕭乾の思想及び軌跡をめぐって（前篇）
『弘前学院大学文学部紀要第 51 号』、顧偉良、2015 年 3 月、査読なし

３わたしの生の証言（蕭乾著）
『弘前学院大学文学部紀要第 50 号』、顧偉良訳・解説、2014 年 3 月、査読なし

４〈谷間の村〉における地獄の一季節
　　――『飼育』を読む――
弘学大語文第４０号、pp, 左９－20
顧偉良
2014 年 3 月、査読なし

５『地図を持たない旅人』
　　――蕭乾と中国作家の運命
『弘前学院大学文学部紀要第 49 号』、顧偉良著、2013 年 3 月、査読なし

科研費報告書

中国知識人の挫折と信念
――蕭乾の思想及び軌跡をめぐって――
Despair and Faith of the Chinese Intellectual Over Thought Traces of Xiao Qian
pp.1-73、顧偉良、弘前学院大学文学部
2015 年 3 月

〔学会発表〕（計　０　件）

〔図書〕（計　１　件）
共著
君子之交：蕭乾夫婦与丸山昇往来書簡
文潔若編訳、上海人民出版社、2015 年 6 月
執筆項目；
●悼念丸山升先生夫人－丸山松女士（顧偉良著）、pp.142-149 ページ
●「未帯地图的旅人－萧乾回想录・解说」（丸山昇著、顧偉良訳）、pp.121-132 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
顧偉良（GU WEILIANG）
弘前学院大学・文学部・教授
研究者番号：２４５２０４０４